

(別紙様式博5)

学位論文要旨

学位授与申請者

林 依蓉

題目：台湾原住民タロマク族における遊び仕事研究

本研究は、台湾原住民族タロマク族が現在も守り続けている植物利用・狩猟・石板屋再建運動を「遊び仕事（マイナー・サブシステム）」として捉え、その実相解明を通して、伝統的な生活文化における遊び仕事の意義を明確する。

第1章 序論

本章では、伝統的な狩猟採集活動を行ってきた台湾原住民族が、なぜ、現在、エスニック・アイデンティティ（自民族文化）の再構築や民族自立の運動に執着するのか、その歴史的背景や現在も直面している諸課題について概説した。また、遊び仕事に関するこれまでの歴史を概観しつつ、「遊び仕事」の定義とその今日的意義について述べ、本研究の位置づけを行った。

第2章 遊び仕事としての植物利用

本章では、タロマク族における植物利用について、(1)食物、(2)燃料、(3)道具、(4)薬、(5)通過儀礼などの事例からその特質を読み取った。彼らの植物利用行動には、喜びや民族の誇りなど「遊び仕事」の精神性や社会性と連動した「自然と共生する生き方」が息づき、また、近代的な社会・技術に容易に触れることができる環境にあっても、彼ら特有の「伝統的真正性」を守りながら植物採集・利用を行おうとする姿勢や、自然を知り尽くし自然と濃密に関わりながら生きる「共同労働」「共同享楽」に基づいたゲマインシャフト的なコミュニティが残っていた。さらに、伝統食から薬草の知恵まで、日常生活の中で築きあげてきた植物の意味性や象徴性はエスニック・アイデンティティとして伝承され、次世代に伝えられようとしている。すなわち、タロマク族の植物採集とその利用には、市場経済と繋がる「労働」としてではなく「遊び仕事」の属性としての精神性・社会性を強く内包していることが理解できた。

第3章 戦前・戦後における狩猟文化の推移

本章では、台湾原住民タロマク族が、戦前から戦後へと継承し続けてきた伝統的狩猟文化について、時代ごとの様態を明らかにし、その100年間にわたる歴史的推移について検討を行った。具体的には、彼等が関わり続けてきた狩猟プロセス、狩猟技術、狩猟に関わる共同体的規範、さらには山霊や祖霊に対する信仰や禁忌（Asalisi）などの精神的側面からその実相を探った。研究方法は、日本統治時代に記録された「蕃族調査報告書（1915）」「鹿野忠雄、臺灣蕃人の狩猟生活（1933）」「高砂族調査報告書（1937）」などの民族誌資料、並びに「佐々木高明（1972）」「野林厚志（2001）」らの戦後における台湾原住民研究を繙き、現代のタロマク族と

の比較も交えて、狩猟文化の実態とその変遷について考察した。加えて、「柳田国男・後狩詞記（1909）」に記された明治期日本における狩猟文化の様態とも比較し、台湾原住民族の狩猟文化が、時代を超えて、また、地理的・文化的違いを越えて、娯楽性、象徴性、精神的共同性などの「遊び仕事」としての特質を内包した生業活動であることを明らかにした。

第4章 遊び仕事としての狩猟

本章では、タロマク族の伝統的狩猟の実態について概観し、その中で彼らが志向する「遊び仕事」の精神性・社会性に関して、以下を明らかにした。1) 狩猟は、男たちにとって身体的活動を通して技能・技術の向上を目指し、その結果得られる喜びや誇りの源泉であった。2) 猟場での作法や猟肉の配分方法など、部族コミュニティの絆を維持するための「分享の精神」や共同体的規範を有していた。3) 山頂に神・祖霊が住み山腹に自然とともに人間が住む、霊の存在を信じるきれいな魂のみが旧部落 Kapaliwa に入ることができる、猟場に入る際「この土地を貸してください」と山霊・祖霊に願うなど、部族特有の自然観・信仰観を30~60代の狩猟経験者らが持ち続けていた。4) タロマク族の狩猟には、自らを律して目指そうとする「真正な猟師像」や「agamoco（名誉の冠り物）」「Sanga（一番の走者に贈られる栄誉）」などに見られる精神的、社会的、象徴的な価値が内包されていた。

第5章 遊び仕事としての石板屋建設

本章では、石板が多用された屋根・床・壁面、祖霊と共に住む精神的空間、祖霊柱や家屋正面の桁に彫られた象徴的造形など、エスニック・アイデンティティを表象する石板屋を建てるのがタロマク族の営みであり、親族と地縁といった親密な社会関係の中で、生活の楽しみや幸福感などを生み出す「遊び仕事」であることを示し、それ故に、kapaliwa に建つ石板屋群が、伝統領域の存在とともに、彼らが作りあげてきた民族自立の象徴的存在であることを明らかにした。加えて、kapaliwa で展開される石板屋再建運動が、伝説、伝統文化、山霊・祖霊など自民族の精神や誇りを次世代に伝えていく教育・研修の場として有用であることを示唆した。

第6章 結論

本章では、まずこれまでの研究の内容を要約し、その上で結論を示した。すなわち本研究は、タロマク族の植物利用、狩猟採集活動や石板屋の建設を、精神的社会的な側面に重きを置く「遊び仕事」とし捉え、評価することができた。また、彼らにとって遊び仕事とは、従来の定義で言われてきた「単に消滅しても構わない副次的生業」ではなく、「必要不可欠な副次的生業」であるとともに、「喜び」や「民族の誇り」「精神的共同性」などの価値を生み出し、彼らが志向するエスニック・アイデンティティの再構築や民族自立運動の源泉となったことを明らかにした。

なお、本研究の成果を踏まえ、今後はイヴァン・イリイチが唱える「自立自存（自律的・自主的で使用価値志向の生活様式）」の視点からタロマク族が守り続けてきた伝統的な生き方をさらに評価していきたい。すなわち、現代社会の文脈にいる我々が、彼らの生き方から何を学ぶべきなのか、指針とすべき点があるとするならばそれは何なのか、考究することを今後の課題としたい。